長州藩における海保青陵経済論の受容

――文政期「萩湊」開発論の基調と背景――

北川　健

「唯武備々々と口上にて云ても国用が不足ニては武の備へハ出来ぬと心得へし、武備の崩れぬ様ニとならは富国の計を詮儀するにしくはなし」（『待豪談』中巻）

「大坂と萩湊と日本国中ニて張合、米相場等大坂下ケ候得ハ買込、又大坂上ケ候時節売時ハ損失と申事無之、誠以日本国中ニて長門萩程上国無之と世評仕候」（『世評内論』）

幕末長州藩の「絶対主義化」、いわゆる「雄藩」へのコースは、経済的には全国的市場支配への登場、進出であった。その経済政策路線、経済戦略を歴史的にプロモート、用意したのは、「一藩重商主義」＝海保青陵の経済政策論であった。その海保青陵経済論の長州藩での受容、発現の初次的形態を紹介、報告する。

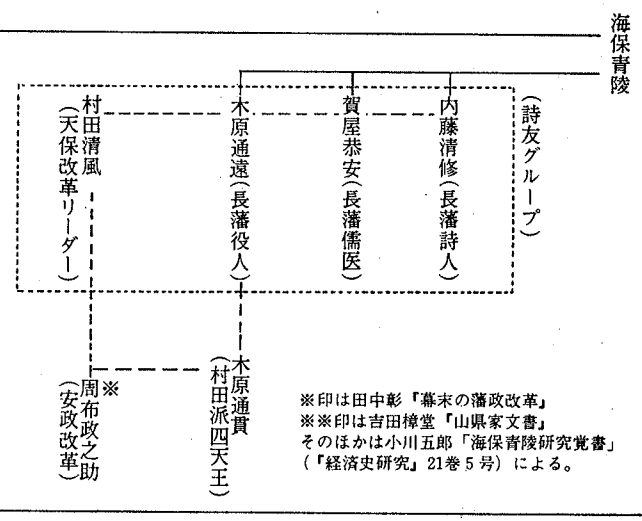
一　長州藩と海保青陵との「連関」

「経世家」海保青陵のユニークな経済政策論は、藩財政の破綻に当面する長州藩の改革派官僚にとっても魅力ある[1]「富国」理論であった。[2]

その長州藩と海保青陵とのパイプは、先学（故小川五郎氏）の指摘する[3]以上に、藩の政・学界の中枢に及んでいたと見なければならない。たとえば、のち藩校明倫館の学頭となる山県太華も文化五年ころ海保青陵と交知。帰国に際して送辞を受けている（『山県家文書』[4]）。また、青陵の論著が改革派当路者のテキストブックになっていたことも[5][6][7]、さらに確証できる。村田清風は大坂との「銀談」に備えつつ「待豪談の事」とみずから記したメモを残してもいる（『大津家文書』[8]）。

結果的には、海保青陵経済論の長州藩での政策的採用と実践は、天保改革のなかでの下関「越荷方」（＝仲継交易局）の一大拡張に象徴的に具現、結実している。しかし、海保青陵との連関をストレートに村田清風と天保改革にだけ捨象していっては、ほかならぬ歴史的展開としてのそれ自体を把握することはできない。天保改革に先立つ文政期の段階で、すでに海保青陵経済論に立脚しての長州藩「富国」策が構想、提起されていたことを、本稿は告げるものである。

図1　海保青陵と長州藩の人的連関



※印は田中彰『幕末の藩政改革』
※※印は吉田樟堂『山県家文書』
そのほかは小川五郎「海保青陵研究覚書」（『経済史研究』21巻5号）による。

二　『待豪談』――「産物マワシ」と「新大坂」下関

文政段階での海保青陵経済論の受容を発現しているのは、『世評内論』[9]（以下『内論』と略称する場合もある）である。『内論』は、青陵の著『待豪談』を抄録、これをサンドウイッチ様に綴り込んでいる。この編成から見ても、『内論』は明らかに海保青陵の経済論に立脚、これを基調としている。

『待豪談』は云う。

「上で御世話やかれねハ小荷物也、小荷物を只壱人づつ相対売にするハ大損成事也」

「民を進めて誉そやして働せて民ニ沢山に利を取せて上て世話をやきて積出させて大荷物にして大坂え廻すへき事也」

「一体を云へハ国中の物他所え出るハよき事也、其国の富む事也、国中の物他所え出れハ金銀国中え入ル理なり」

いわゆる青陵特意の「産物マワシ」の論である。藩権力による「国産品」の大量集荷と大坂販出による大幅利潤の獲得、を強調するのである。

そして、その長州藩の「産物マワシ」の拠点として、下関港の開発と拡張＝「新大坂」の建設を提唱する。

「加州にせい長州にせい天下の第一の大国なれは仕方次第にて近辺の金銀は皆流れ込理也、……長州ニハ下ノ関の岬有て九州四国をさっはりと引受らるる也、然は此両岬は大坂にこと成事なし、新大坂に取立れば新大坂出来る理也」

三　萩「新湊」開発案――『世評内論』の主張と構想

この『待豪談』＝海保青陵の挙示する下関港を城下萩におきかえての論が『世評内論』である。『待豪談』のフランチャイズ版、藩都萩中心の構想である。その中核をなすのは萩「新湊」の開発案である。

「小畑・越ケ浜の間を掘抜、廻船通路自由能船相成、越荷等売買弁理宜相成候ハヽ、北国船不残、九州の舟も越ケ浜へ入津仕、彼港御取扱やふニて御銀相備り可申と世評仕候」

すなわち、萩湾の北縁にあたる小畑・越ガ浜[10]間に長さ一〇〇間、幅五〇間、深さ一五間の「掘抜」＝運河を開削し、ここに問屋一〇軒、蔵五〇棟を設置。「諸国廻船」を誘致して他国交易の一大拠点とする、というものである。

「北国船大坂廻リハ壱ケ年ニ一度の外不相成由、越ケ浜ニて越荷相成候ヘバ一ケ年ニ三遍ハ自由ニ相成候ヘバ……大坂と萩湊と日本国中ニて張合、米相場等大坂下ケ候得ハ買込、又大坂上ケ候時節売時ハ損失と申事無之、誠以日本国中ニて長門萩程上国無之と世評仕候」

長州「廻船」への諸国協力者も表8のようにリストアップ。諸国売米＝「越荷」の収益を表1のように見積っている。

表1　萩湊・大坂「越荷」差引目安

萩湊		大坂
銀100匁＝米2石2斗（和市）		銀100匁＝米2石（和市）
米100万石買付 買付銀	45,454貫余	米100万石売付 売付銀　50,000貫
勢銀 （口銭運上銀）	4,545貫余	口銭運上銀　5,000貫（引残）
代銀荷物払 （口銭運上差引）	40,909貫余	
勢　銀 （口銭運上銀）	4,090貫余	
勢銀合計	8,636貫余	

図2　「萩湊」関係地

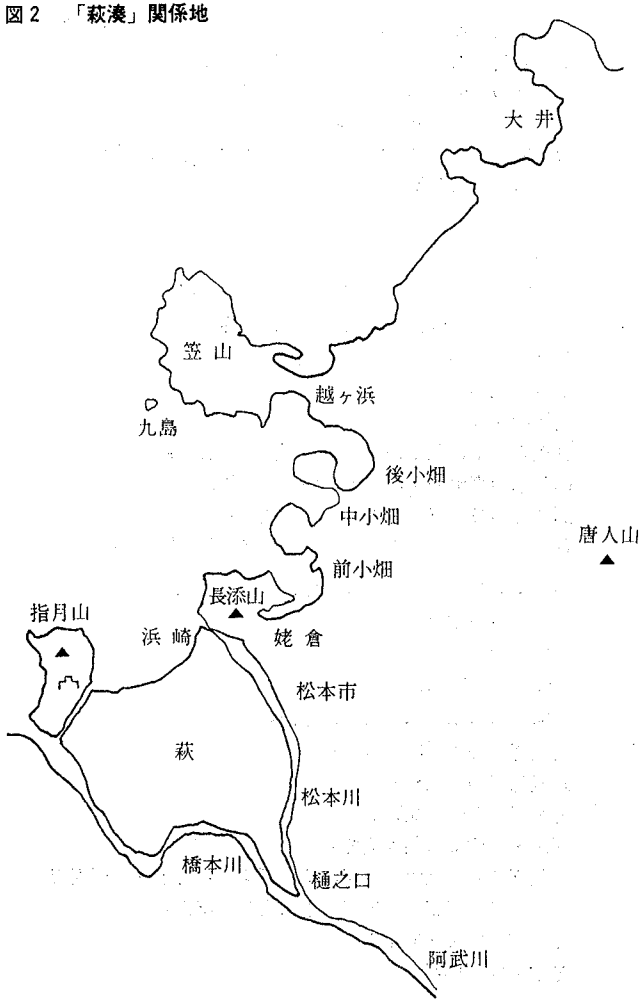


表2　萩「新湊」構想と関連諸施策

施　設	運河の開設（越ケ浜―小畑）。 見立台場の設置（大井）。 定夜燈の設置（笠山）。 海上保安祈願所（金比羅社など）の建立（笠山・小畑・唐人山）。祈願捨石による波戸の保持（九島）。 新川筋の開削（小畑―姥倉―樋之口）。 船大工町・鍛冶屋町の開設（大井）。 遊女屋の開設（越ケ浜・大井）。遊女屋町での帯刀禁止。 賤民居住区の整備。
運　営	湊規則の厳正施行。 湊大年寄への熊谷五右衛門の任用。世話役への才器登用。 他国問屋の誘致。防長出身商人の招還。 越後～長崎の特約商人との提携。 市場の振興（松本市）。 芝居の開催。 札銀の使用，現銀の保有。金銀流出の防止。 国産米の高値売出，他国米の安値買入。 酒造屋の設置（長添山），酒の積出。 萩近在での細工物生産（ぞうりなど）と他国売出。
関連施策	上関・室積での交易。飛脚連絡。 瀬戸崎での交易。 丸尾崎港の開発。 諸河川での通船，運送。（山口―小郡など） 奥阿武から川上への通船，運送。 阿武郡百姓人馬による運搬。 阿武郡での促成植林。 阿武郡での牛馬飼育。 阿武・山代での菜種栽培。 山代紙の製品拡張。足軽による紙すき。北国への紙売出。 萩・山口・三田尻の無職武士による傘細工。 山口町人による皮細工。 冬季製塩の再開。

そのほか木草の利用法，皮革の加工法，換金作物（たばこ・苧・茶・綿など）の栽培法，河川の浚渫法・通船法，漁猟法，捕鯨法，航海法などまで及ぶが，省略。

そして、これ「御城下越ケ浜大経済場所」が実現するなら、「大坂ニ差継候ての大湊、大商ひの場所」「大渡(都)会と相成」ると描く。

この萩「新湊」（以下「萩湊」と呼ぶ）の開設をメインプランとしつつ、瀬戸崎・丸尾崎・室積・上関諸港での他国交易、それに椹野川など諸河川の通船化、国産米の販出と北国米の購入、冬季製塩の再開などなど、藩的規模での一大経済総合開発構想をなす（表2参照）。その基幹は「西廻り」海運＝全国市場ルートに大々的に結接するにある。

四　『世評内論』の背景――化政期の長州藩

こうした「萩湊」開発論＝『世評内論』の登場の背景には、いうまでもなく①領主財政の危機と②西廻り海運の発展、③商品経済の進展がある。

領主財政の危機

『世論内論』は云う。

「御所帯等の儀ハ御祕密の御事、他より種々と申或は相考候も寔以奉恐入候御事ニ候へ共、御家頼ハ一統ニて、現勤衆も御上ハ不及申

表3　石見温泉津港「諸国客船入津」状況

	大　坂	泉　州	長　門	石　見
享保1―享保10	116	129	1	2
享保11―享保20	57	91	3	3
元文1―延享2	39	101	5	3
延享3―宝暦5	36	135	6	3
宝暦6―明和2	28	62	1	3
明和3―安永4	32	51	1	9
安永5―天明5	19	41	5	12
天明6―寛政7	22	45	11	28
寛政8―文化2	8	22	—	7
文化3―文化12	4	8	—	—
文化13―文政8	8	4	25	18
文政9―天保6	1	—	28	66

（藤沢秀晴『山陰の歴史』92―93Pから作成）

上、私の身ニも懸る事候へハ此時節前段の恐れを不顧……」

「諸士御家人、君の奉禄計ニては一家不相調、次第ニ貧究いたし終には御奉公の本意を失ひ候様成ル儀も致出来間敷ものに無之哉と世評仕候」

藩財政の危機は、いまや家臣団全体およびその成員個々の「私の身ニも懸る」緊要の問題として自覚され、その危機意識から発言、提言が意図されているのである。「君の奉禄計ニては一家不相調」という眼前の現実認識から、下層家臣の救済策としてその産業従事「草履・わらじ作り」などまでも云い、その就業保障のためにも「萩湊」の開発を提案しているのである。

「萩・山口・三田尻其外近在是迄無職の御家人ニ傘細工相調せ候得は至極の重宝相成候処、……萩湊相調へば傘何万本張候ても向口相捌候道理有之」

「無役の者ハ別ニ生産を治むへき所作可有事也、老若共ニ其人々得手成業何ニても得手成るを仕調其物〳〵船え積出候て今日取続の介となり上御厄害少く……御奉公仕度儀と世評有之」

海保青陵の説く下関ではなく、「御城下」萩に引きよせての「大湊」開発が企画されている理由も、一つにはそこにあろう。城下萩を中心とする長州藩武士団の窮乏と救済こそ、『内論』の当面する根本的な問題であり課題であったのである。

事実、長州藩の家臣団も、藩財政逼迫の家臣団への転稼、たびかさなる[11]「御馳走米」によって、その給与収入は大幅に減額されていた。『内論』はその状況をも云う。

「太概曽祖父よりの借財にて其身家督の節三百石の者半分、百五拾石の者現石手取不相成程の算用前ニて大方相当の者百人ニ六七十人も有之様世評仕候」

当然、現状打開、財政政革が必須の政治課題となる。文化九年（一八一二）、長州藩家老（当職）堅田就正らが藩政改革を「私議」したかどで処罰されている。[12]「改革」が一部首脳部の間ではひそかに模索、検討される事態となっていたのである。

そのころ（文化一〇年）加賀藩では、海保青陵派の二奉行が先年（文化二年）解任されながらも、「産物方」の再設とともに返り咲いている。[13]翌年、長州藩でも「国産方」を創

表4　但馬諸寄港「客船」状況

	年代不明帳	文化11・13帳	天保7年帳
摂津	291	125	
紀伊	225	12	
伯耆	117	115	
石見	231	183	137
長門	36	31	28
周防	14	192	
安芸		82	
阿波	27	11	35
讃岐	100	110	

（『兵庫史学』50号。柚木学「日本海運史と但馬」から作成）

表5　長州藩の回船数の変遷

郡	寛政4	文政7	天保3
大島	62	245	288
熊毛	71	185	249
佐波	23	92	125
吉敷	42	81	221
厚狭	39	99	111
大津	100	116	114

（『山口県文書館研究紀要』7・吉本一雄「諸郡戸籍帳と回船数」から作成）

文化2（一八〇五）		海保青陵、加賀藩に入る。
〃 3		加賀藩で青陵派の二奉行解任され、青陵は京に帰る。
〃 5	長州藩の山県太華（のち明倫館学頭）に青陵が送序。	
〃 ?	このころ長州藩の京都監司役木原通遠、青陵と交わる。	
〃 9	長州藩家老堅田就正ら藩政改革を私議したかどで処罰される。	
〃 10		
〃 11	長州藩、国産方を設置。	加賀藩、産物方を再設。青陵派官僚復活。
文政2（一八一九）	越ケ浜の拡張工事案あり。	
〃 ?	萩「新湊」案（『世評内論』）なる。	
〃 12	長州藩、産物会所を置く。苗字帯刀の大巾免許の方針。	
〃 13	長州藩、産物会所を強化。	
天保2（一八三一）	長州藩で全藩一揆。	
〃 11	村田清風、下関「越荷方」の拡張と「三十七カ年賦皆済仕法」を断行。	

設。青陵の云う「産物マワシ」の方向がたどられつつある。この延長線上に「萩湊」開発論の登場＝海保青陵経済論の受容はあることになる。

西廻り海運流通の発展

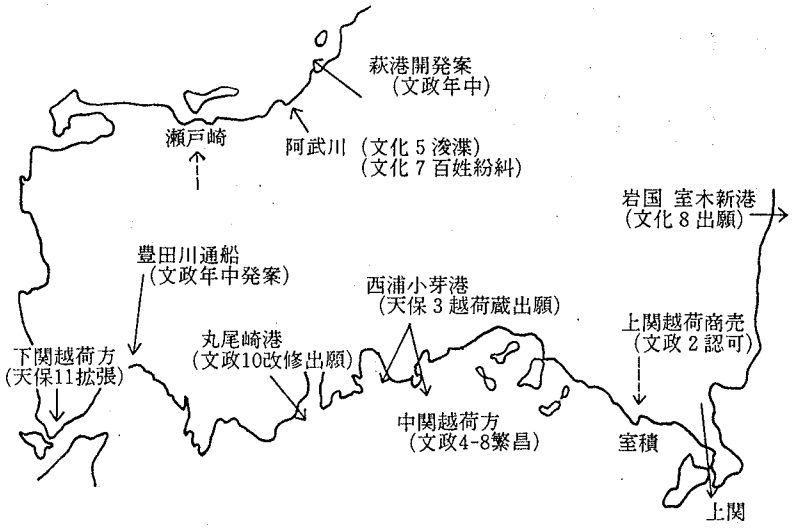
「萩湊」計画は、西廻り海運＝全国的流通機構への挙藩的、大々的な結接と参加を企図してのものである。背景には、この期の海運流通の発展がある。西廻り海運ルートに沿った各地の保有廻船数、入港廻船数はこの期増勢にある（表3・4・5）。

地域商品経済の発展と在方資本の成長

西廻り海運流通への結接こそ地域商品経済の進展を約束するものであった。化政期から天保期にかけて、西廻り海運への結接を求めての動きが諸地域で表出している（図3）。その先頭に立つものは、各地商品経済の中軸を担う在方資本であった。各地の「越荷商売」「越荷蔵」「河川通船」「波戸改修」など発起・出願の主体こそは、それぞれの地域の在方資本である。

『世評内論』の主張は、これら在方資本の動勢にマッチ

図3　海運流通への結接を求めての動向（化政・天保期）



する。「世評」とは彼らの間でのでの世論ではなかったのか。それらを藩中心、萩を頂点に糾合しようとしたものが『内論』ではなかったろうか。

当時の在方資本の力量と、藩財政のそれへの依拠は、藩府への「借上銀」「当用銀」の割当額の比重に現われている（表6）。こうした在方資本の成長を、「萩湊」計画は次のように取り込もうとするものであった。

五　「萩湊」開発運営の資金と組織――文政期の資本と権力――

「萩湊」開発事業の必要経費を、『内論』は次のように見積り、

資金＝銀一、六〇〇貫余　人夫＝延一二万五、〇〇〇人役

この資金調達を公募に求め、総員一三〇人（倍人数二六〇人）から銀三、二〇〇貫の応募を見込んでいる。

銀四〇貫　三〇人　一、二〇〇貫
銀三〇貫　五〇人　一、五〇〇貫
銀一〇貫　五〇人　五〇〇貫
計　一三〇人　三、二〇〇貫（倍人数六、四〇〇貫）

出銀　三、二〇〇貫＝工事入用銀一、六〇〇貫＝運用銀一、六〇〇貫

併せて応募奨励のための報償策として、「新湊」問屋株をはじめ「扶持」「永苗永

表6　文政・天保度の借上銀・当用銀の割当額

文政11年借上銀	萩市中 1500貫	諸郡 2000貫
天保1年当用銀	萩市中 1000貫 同用聞中 1000貫	諸郡 1000貫

（田中彰『藩末の藩政改革』63頁，『毛利十一代史』から作成）

刀」など「下望ニ任せ」て反対給付することとしている。こうした封建的栄典付与による豪農商層の糾合動員という方法は、やがて文政一二年の「産物会所」の設置と併行しての苗字帯刀の大幅免許の方針採用[14]にも見ることができる。

ともあれ、全く民間資本に依処するその資産計画である。

次に「萩湊」運営の組織。これまた民間事業家の登用、動員に依拠する。

「熊屋(谷)五右衛門萩湊大年寄可被仰付、彼者事大坂其外他国高名の者ニ付宣可有之、其外御国中百姓町人何にても己れを忘れ、御国恩奉報念願ニて其事才器有之者萩湊取建世話役可被仰付」

萩城下の特権商人のナンバーワン熊谷五右衛門（表7参照）を、そのネームヴァリュー「他国高名」を理由にトップ「萩湊大年寄役」にすえ、スタッフ「取建世話役」に「奉恩」「才器」の豪農商を任用する、というのである。

それは城下特権資本との伝統的な関係を保持しつつ、新鋭、新興の在方資本の糾合編成を図るという、新旧両資本の一種のバランスの上に立脚しようとする構図である。意欲的でありながらも抱き合わせ的であるところに、この期の歴史的段階の選択と対応の特質と限界を見ることができる。

事実、この「萩湊」計画に見られるような新旧縫合の発想と方式が破棄、捨脱されていくところに、その後の歴史の展開はある。

表7　長州藩の負債弁償予算（国元分）

文政1年

借　　元	利　息　銀	年賦返済銀
熊谷古借分		47貫037匁
熊谷・大黒屋・小林・田村・尾崎から当用借分	181貫345匁	
熊谷・大黒屋・小林・田村から借上米分	48貫700匁	
町地方借上銀納切分	51貫600匁	860貫000匁

（田中彰『幕末の藩政改革』64頁，『毛利十一代史』から作成）

六　「萩湊」開発論の行方――天保改革の意義

結果的には「萩湊」開発案は実現しない。天保改革に至って「大湊」として一大拡張を見たのは、下関「越荷方」であった。云うなれば「萩湊」開発案は〝まぼろしの萩湊〟に終わるのである。下関港こそは、かねて海保青陵が『待豪談』で示挙し、村田清風が「日本の咽喉[15]」として属目する西廻り海路の絶好の要衝であった。その立地状況から「新大坂」にまで見立てられ、長州藩「富国」の大拠点、全国的流通機構乗出しの基地に選定されるに無比のものであった。

「下関八幡方役所へ越荷方兼被仰付、四国九州より奥羽北国の米穀・綿・干鰯等、大立物幾千石より乃至百石、五十石迄所質物取極、御貸銀被仰付候ハバ外の利足を以、御国中を培養被仰付候、富国の術にも相当可申候」（「藩政改革意見書」）

こうした「大湊」開発の政策的採用を見るに至った事由は何か。そこには化政期以来の「産物会所」仕法＝藩内市場支配の破綻がある。文化年以来、藩はいわゆる専売制を推進。文化一一年に「産物方」を、ついで文政一一年「産物会所」を設置。翌一三年に「産物会所」を強化している[16]。

この文政の「産物会所」仕法こそは、藩内の商品経済を権力的にエンクロージャーし、みずからの一手売買市場を権力的に創出、編成、構築しようとする

表8　長州藩との回船御手伝人柄名付（兼て示談仕置候面々）

越後	（新方）	早川忠兵衛
	（柏崎）	山下忠兵衛
加賀	（金川）	山本長左衛門
丹波	（由良）	「多人数」
豊前	（小倉）	薩摩屋
		大坂屋
筑前	（相島）	
	（明ノ浜）	
肥前	（佐賀）	森彦兵衛
筑後	（久留米）	鉄屋正助
		宇加屋佐助
肥後	（熊本）	油屋和平治
芸州	（広島）	世並屋
		対島屋
摂州	（兵庫）	高日屋
		柴屋
阿州	（徳島）	大和屋
紀州	（宇和瀬）	浜中八郎兵衛
和泉		「一人」
江戸	（小船町）	紀伊国屋太兵衛
長崎	（大年寄）	林猪三太
		森半右衛門
	（長藩出身）	中井勇右衛門
	（長藩出身）	加藤平兵衛

ものであった。それはたしかに海保青陵の云う「上で世話をやく」論の政策的実践であった。しかし、海保青陵の云う「民に沢山に利を取せ」「民と倶ニ利を得る」（『待豪談』中巻）というようには決して展開されなかった。

「領中所々に役所を立て、国中の産物何に寄らず悉く価易く買上げて、之を大坂に船にて積上せ売払ふ事になりぬ」（「浮世の有様」）

「是迄農商の利とせし事は悉く上の益となり……」（同右）

「殊更株座と申候て諸民の利を壱人ニて括り候様……」（天保六年投書）

「御両国中ハ上ニ有ても下ニ有ても同様と申儀を不存、纔の帳面ニ計目を付候故、国家の大計所詮間違申候」（同右）

それは藩内農民大衆の犠牲の上に強行されるものであった。いきつくところ農民大衆の大反撃、空前絶後の全藩一揆（天保大一揆）を招起して破綻したことは知られている。

この全面的な農民糾争に「蹴立」てられて、一方的な藩内収奪の前途が断たれたとき、よりリアルな対応としての「富国の術」＝「大湊」開発が必至、登場可能となった、と判断

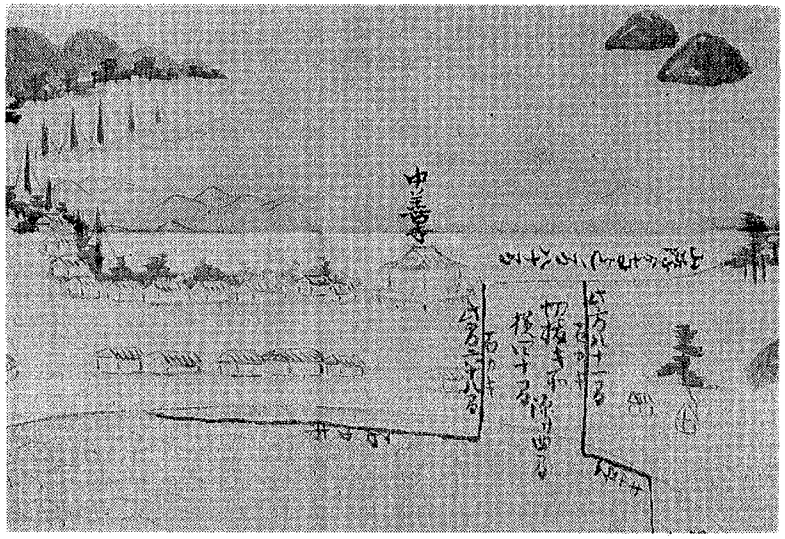
元文５年の越ガ浜・小畑近辺の図（『地下上申村絵図』）

できる。「大湊」開発こそは「外の利足を以、御国中を培養」する藩外収奪路線の浮上であった。

ここに、かつて『世評内論』が掲げた「大湊」建設は、場所を変えて実現したことになる。この下関「越荷方」と「萩湊」計画を対比するとき、両者の特質と歴史的段階が明きらかとなる。すなわち、後者は城下家臣団の就業保障と、城下特権資本との結合関係を考慮している点で特質と限界を、前者はそれらを隔脱、度外視した地平に活路を拓いているところに新規性と画期性をもつ。下関「越荷方」で登用され抬頭していっているのは、中野半左衛門や市原李左衛門ら在方資本である。[17]

天保改革自体、古借整理「三十七ヵ年賦皆済仕法」を打出し、これまで密着してきた城下資本との対別に踏み切っている。「流弊改正」意見[18]は熊谷・小林ら城下の特権資本を名指しで非「国民」呼ばわりしている。

「市中町人共緩怠にて御家来中の無礼の仕来多、近年御所帯御難渋故、熊谷・小林其外……御国民と申本意を忘、役向えも及無礼……」（「流弊改正に関する意見」）



文政２年の越ガ浜「切抜キ所」見込み図（『諸事小々之控』）

いまや藩権力はみずからの意に応える「国民」を城下資本とは別のところに求めることになる。「城下ニ富家アルホド、国ノ益ニナルコトハナキ」（『稽古談』）とは、かねて海保青陵の説言であるが、「城下ノ富家」も藩権力の意図＝「国ノ益」に沿わぬものとなっている。

おわりに

文政期の「萩湊」構想から天保改革の下関「越荷方」拡充策への進展、それは藩権力の対資本関係の転替でもあった。そこに始まる藩権力みずからの権力的な専行＝専制化こそ、「藩みずからの商人化」の路線であった。そこで打ち出されているのは、みずからの「興利」は大々的に追求しても民間の「興利」は制禁する[16]という、まったくもって藩による「興利」独占の方向であった。天保改革に始まるこうした藩の「興利」独占＝「藩みずからの商人化」の路線が「民富」「民利」と背反、対立するもの[17]であったことは云うまでもない。「民」概念はもはや万能的には通用しえない。安政期から「小民」範疇[18]が政策的にも登場してくるわけである。しかも、その「小民成立」の仕法もまた生産者農民からは「悪魔」呼ばわりされるものであったことは、別に述べた[19]。

階級的矛盾と対立を深大化させつつ、それだけに領外収奪＝藩外交易の路線、全国市場への割込みへと向わざるをえない。いきつくところ幕府との対抗関係、長州藩の政治的突出が必然化するゆえんである。

「越ケ浜掘抜根元は富国強兵の術より事起候」（『世評内論』）

「大坂と萩湊と日本国中ニて張合……」（同右）

もちろん、「富国強兵」「大坂と……日本国中ニて張合」う経済戦略＝全国的市場支配への進出が惹起する政治アクションまで、「経世家」海保青陵・「萩湊」開発＝『世評内論』論者らの思い及んでいたことではない。

註① 海保青陵の経済政策論を導入、政治実践した藩として加賀藩が著名。青陵みずから加賀藩に入って指導している。（藏並省自「海保青陵と加賀藩」『日本大学文理学部研究室年報』一〇輯・昭和三六）

② たとえば、長州藩の藏元役人（大坂検使役）の木原源右衛門（通遷）は海保青陵と通交。その子通貫は天保改革の指導者村田清風のブレーン「四天王」の一人であった。村田清風と海保青陵との〈連関〉には学者・文人・医師・官僚ら一部インテリグループが介在。青陵の著『枢密談』『待蒙談』も、ほかならぬ長州藩士を聴講者にすえての講談録であった。藩校明倫館には青陵の著書一〇冊ほどが清風から伝蔵されている。（註⑧による）

③ 小川五郎「海保青陵研究覚書」（『経済史研究』二一巻五号・昭和一四）

小川五郎「海保青陵の遺著に就て」（『経済史研究』一四巻五号・昭和一〇）

④ 吉田樟堂文庫

⑤ 清風みずから改革路線の継承者周布政之助に『待蒙談』の熟読を勧めている。（田中彰『幕末の藩政改革』一七四頁・昭和四〇）

⑥ 小川五郎「海保青陵の遺著に就て」（前掲③）

⑦ 明治一八年、山口県庁史誌掛（近藤清石）にあっては、青陵の著書『稽蒲談』など一〇冊を「旧明倫館書籍の内、先年師範学校ヨリ借請」リストに載せている。（山口県庁地誌掛『諸綴込』明治一八）

⑧ 吉田樟堂文庫

⑨ 旧山口県史編纂所筆写史料。原本の所在は不明。今日の中野家文書中には見出せない。著者は不明。ただし「御家類ハ一統ニて……私の身ニも懸る事得ハ（ママ）」「塀の手越の事ニ候ハ」などとあるから、長州藩士。成立は、記載事実から見て文政七年（一八二四）から同一〇年（一八二七）にかけて。伝来は豊浦郡の豪商中野家（旧県史編纂所員石川卓美氏の証言。氏こそ昭和十年代に当文書の筆写に従事した）。

ちなみに幕末の当主中野半左衛門は藩の萩長交易方に起用されたばかりでなく、みずから松前交易をはじめ木屋川通船・北浦捕鯨事業などまで手がけた人物。『内論』の主張するところを身をもって実践、体現している。この中野家での『内論』の伝来は合点がいく。『内論』のいう「世

評」とは、こうした中野ら在方資本によって担われ、プロモートされていたのではなかったのか。

⑩ 越ガ浜については、「掘切」「切抜」が文政二年に藩当局で企画検討されている。この年二月「越ケ浜掘切積高」が兵庫津の高田屋嘉兵衛・梅屋吉兵衛あてに、ついで七月頃「越ケ浜切抜の事」伺書が国元から江戸屋敷に出ている（『諸事小々之控』）。『世評内論』も「越ケ浜掘抜の事ニ付ては先年兼重忠左衛門抔目論見ニて書調候物も有之様世評仕り、尚其以後も追々論者有之やふ承り及ひ候」と記している。前頁写真参照。

⑪ 臼杵華臣『山口県文化史年表』（昭和三一）

太田報助『毛利十一代史』（明治四三）

⑫ 太田報助（前掲⑪）

⑬ 蔵並省自（前掲①）

⑭ 田中彰（前掲⑤六四・六七頁）

⑮ 村田清風「清士談」（『村田清風全集』上巻）

⑯ 田中彰（前掲⑤六五頁）

⑰ 小林茂「長州藩明治維新史研究」一〇〇～一〇六頁（昭和四三）

⑱『村田清風全集』上巻

⑲「此度談」（前掲⑱）

⑳ 安政三年の坪井派の産物取立策でも「既ニ文政生産物取立の大害も不遠事ニ候」と懸念（前掲⑤二〇八頁）。またこれに替わった周布派のそれも、生産者農民からは「悪魔」「退散」呼ばわりされている（後掲㉒）。

㉑ 井上勝生「幕藩解体過程と全国市場」（『歴史学研究』一九七五年度大会特集号）

㉒ 北川健「万延元年周防大島の悪魔退散一揆」（『山口県文書館研究紀要』四号・昭和五〇）

付記 当稿の内容は、山口県地方史研究大会（一九七〇年・萩大会）と地方史研究協議大会（一九八一年・愛媛大会）で発表したところのものである。また、一、二の史料文献について、石川卓美氏（元山口県文書館）、三浦吉春氏（日本大学三島図書館）津田秀夫氏（関西大学）から教示を受けることがあった。記して謝意を表したい。